

C-55 布地による複曲面構成 (第2報) いせにおける布地の物性の影響
文化女大家政 三吉満智子 ○土井真知子

目的 布の織目の空間と織系の柔軟さを利用して布を変形させ、平面的な布そのま
まに複曲面を構成することが、いわゆるいせ・くせとりとよばれる技法である。この
技法の難易度を左右するものが布の物性であると考え、いせやすさとの関係を調べた。

方法 A) 実験者5名により14種の布を用いて同一パターンでいせ実験をした。針
目(できるだけこまかくする)アイロン温度(素材ごとの適温)アイロンのかけ方(縫
目を縮めるだけでなく、肩先部の複曲面をつくり出すようにする)という日常の被
服構成に近い状態のもとで技術示範を一度見せた後、布の順序はランダムにして行な
った。実験後、実験者にいせやすさについて順位法で回答させ、また30名のパネラー
によって出来上りの美しさについて官能検査をした。B) 布地の物性は、厚さ・織密
度・硬軟度・織系の太さ・撚り数・撚り縮み率・平面重・剪断変形量・伸長荷重など
について各々2~10回の繰り返しの平均を求めた。C) A)とB)との関係、及びB)の物
性間の関係を相関分析によって求めた。

結果 布によるいせやすさの順位は、Kendallの一致度係数で検定の結果高度に有意
であった。布地の物性のうちいせやすさと高い相関のあったものは、布の厚さ・見掛
けの比重・初期剪断しわ発生時の変形量・斜方向の伸長2.5%・5%時の荷重・2.5%回復
時の荷重差等である。また剪断しわ発生時の変形量は、織系の太さ・撚数・撚縮量・
カバーファクター・見掛けの比重等と0.5~0.7の相関があり、これらも他因子と複合的
にいせやすさに関係があると考えられる。いせやすさと美しさには高い相関があった。